滋賀 近江八幡 水都八都

おうみはちまん すいーと はーと

社団法人 近江八幡観光物産協会
OMIHACHIMAN TOURISM ASSOCIATION

「水都」は水郷のまち、「八都」は近江八幡を指しており、これをスイートハート(恋人)とかけて“近江八幡は郷土の人にとっても観光客にとっても「恋人」のような素晴しい街である”ということを表したものです

発行責任者:近江八幡観光物産協会　3000部発行／定価50円
滋賀県近江八幡市為心町元9-1(白雲館内)　TEL:0748-32-7003

2005年2月1日初版　2009年3月1日第2版　2014年3月20日第3版　2023年8月20日第4版　No.21

特集 近江商人

西川甚五郎邸 ❶

通常非公開

大手寝具メーカー西川株式会社の歴代当主が第二次世界大戦前まで暮らしていた屋敷です。

西川株式会社は初代仁右衛門が18歳で行商を始めた永禄9年(1566年)を創業年と定めていて、450年を超える老舗企業です。初代は天正18年(1587年)際、八幡町に蚊帳・畳表などを商う屋号〈山形屋〉を開設し、元和元年(1615年)には江戸日本橋に出店しました。

2代目甚五は蚊帳の製造・販売に創意工夫を凝らしてヒット商品とし家業の発展に尽くしました。7代目利助は積立と運用により自己資金の充実を図るとともに、年2回の決算期に純益の3分の1を分配して店員のやる気を大いに引き出すなどの改革を行って、困難な時代を乗り切りました。

11代目甚五郎は明治20年(1888年)に蒲団の取扱いを始めて経営を安定させる一方、八幡東学校の建設、八幡銀行の開業や八幡製糸株式会社の設立など地域貢献にも功績を残しました。13代目甚五郎は海外留学の経験を経営に取り入れたほか、参議院議員として池田内閣の北海道開発庁長官を務めるなど政治経済における活躍により近江八幡の名誉市民第2号に選ばれています(第1号はウィリアム・メレル・ヴォーリズ)。

西川利右衛門邸 ❷

見学施設

西川家は屋号を大文字屋と称して蚊帳や畳表を商い、江戸、大坂、京都に店を構えました。現在資料館として入館できる施設は3代目によって宝永3年(1706年)に建てられたもので、昭和58年1月に国の重要文化財に指定され、昭和60年10月より33ヶ月の工期を経て、改修されました。昭和5年に後継者が無いまま11代目が亡くなり、約300年にわたって活躍した西川家は終焉を迎えました。

西川家の家訓は「先義後利栄・好富施其徳」。義理人情を第一とし、利益追求を後回しにすることが商売繁盛となり、得られた富に見合った人間形成を行えと説いています。

西川庄六邸 ❸

2代目西川利右衛門の子「庄六」を初代とし、蚊帳・綿・砂糖・扇子などを商いました。3代目のころには江戸日本橋、大坂船場に出店を設け、東京では砂糖卸商として江戸時代から続く唯一の老舗です。(現社名、メルクロス株式会社として営業中です)歴代主人は和歌、俳諧など文化人との交流もあり、とくに8代目は京都一燈園の創設者西田天香氏と懇意でした。建物は滋賀県指定文化財で、令和3年から耐震補強を含む保存修理が行われました。

森五郎兵衛邸 ❹

初代五郎兵衛は、伴伝兵衛家に勤め、別家を許され、煙草や麻布を商いました。やがて、呉服・太物など取扱商品を増やし、江戸日本橋や大坂本町にも出店するなど活躍しました。

現在も、東京日本橋室町に「近三商事株式会社」として営業中です。

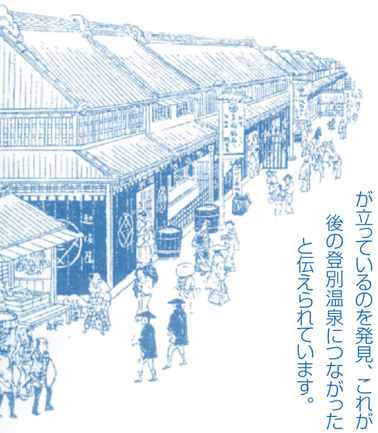
なお、市立資料館の一部である歴史民俗資料館(❺)は、かつて森家の控宅でした。

岡田彌三右衛門邸址 ❻

初代は、慶長19年(1614年)に24歳で北海道松前に渡り、呉服・太物などを商い、後に漁業も手がけました。5代目の頃には、最大23もの漁場を請け負い、炭坑の採掘、農場経営、道路の開削工事など多方面で活躍しましたが、場所請負制度の廃止などが影響して、明治34年に北海道を引き上げました。

大正7年の北海道開道50年記念事業では、功労者として岡田家に追彰状が送られ、13代目岡田八十次が受領しています。

なお、11代目が壮年の頃、函館より室蘭に向かう道中で登別の山中で休憩した際に、川筋に湯気が立っているのを発見、これが後の登別温泉につながったと伝えられています。



しまつしてきばる

きばるは働く、しまつは節約の意味ですが、食べるものを食べず、着るものも着ずに無我夢中に働くという意味ではありません。

中井源左衛門(日野商人)は「金持ちになるのは決して運ではなく、酒宴、遊興、贅沢をせず、ひたすら長生きと始末することを心掛けて商いに励むことが、五万・十万両の金を溜める唯一の方法であり、貪欲な投機的商いは先祖の加護や自然の道理に見放され、結果的に成功には結びつかない。しかし、始末することとケチとは全く別のもので、ケチでは金持ちになれない。社会のために大枚をはたくときははたくが、無駄な金は使わず、世のため人のために生きる金を使い、飲むときは飲み、遊ぶときは遊ぶが、節度を持つことが必要で、金持ちになるためには、常に始末の心を忘れず、奢りの心を戒めなければならない」と記しました。小野善助(高島商人)は、「人はどこで生活するにせよ、思いやりの気持ちがなければ暮らしがたいものであると考え、常に相手の身に良かれと心がけ、自分の奢りのためには銭も使わず、無限にある水といえども無駄にしないほどに始末をし、贅沢と自惚れに陥ることを警戒し、精勤と始末に徹して、北陸や東海地方を行商して、ついに奥州盛岡に開店することができた」と述べています。

お助け普請

近江商人は地場産業の育成や地域の活性化があってこそ商いが行えました。よって、お互い様という観念や地域への貢献を疎かにすることはありませんでした。凶作や不況がある時には、進んで自宅や神社仏閣への改築等の造作を行っていました。今で言う公共事業的なものを率先して実施しています。

押込隠居

先祖の苦労の賜物により今日の繁栄があるのであって、主人としてはわずか30年ほどの間、奉公する身と思い、家業を守り商いの繁栄に勤めるようにと伝えています。店の運営も、店と個人(主人)は別々のもので主人の私有財産ではないと考えられていたため、独断で物事の決定は行われず、今で言う取締役会が開かれていました。

よって、不的確な人物なら主人の座を追放したり相続権の剥奪等の事例もあります。

諸国産物回し

陸路や海路を通じて、上方から江戸に運ばれた商品を「下し荷」、上方や近江に運ばれた地方の物産を「登せ荷」として、双方で商いを行いました。行商で成功するとその地域に出店し、新たな商売のため、大量輸送や荷物の保管場所の基地としても利用し、各地に出店している店同士で商品の回転を行い、効率の良い運営に努めました。

薄利多売

一度で大きな利益を得るような商いは良しとせず、長期的な商いを行うことを求めています。そのため、日々の努力と始末が欠かせませんでした。

博打・投機的商法の禁止

この類の文言は実に多くの商人家訓等の形で残しています。八幡商人の中でも「博打、諸勝負事堅く禁止のこと」(原田四郎左衛門)、「御法度第一、並びに、博打の事」(岡田彌三右衛門)、「博打、諸勝負事の儀は申すに及ばず、大酒、色情の儀、堅く相慎み互いに行儀正しく出精致さるべく候」(市田清兵衛)等と、子孫への戒めとしています。

勤勉・実直

小林吟右衛門(湖東商人　現チョーギン)は、「小商人であっても、世の中の一員としての自覚を持ち、不義理や迷惑をかけないように、絶えず周囲や世間の人達のことを思いやりながら、懸命に働けば、立派に一人前の商人として認められ、やがて相当の資産を築くことが出来る」と記しています。

最初から欲にかられて大商人になってやろうと意気込むことより、常に人の立場や周囲世間への配慮を怠らず、社会の役に立つという信念をもって、ひたすら働くことが立派な商人への近道だったといえます。

外村与左衛門(五個荘商人　現：外与)でも、「顧客の望むときに売り惜しみせずに売り渡し、安値で販売したことを悔やむぐらいの商売ならば顧客との末永い取引が出来る」と述べています。

商人倫理と販売戦略

近江商人は江戸中期頃にはすでに複式簿記を確立させ、経営状況を把握していました。また、行商では、遠い他国まで出かけることで、儲けたいという欲が自ずと出ますが、そうした欲望を抑えるため神仏への信心をもつことを進めるなど、卓越した経営感覚と倫理感を持ち合わせていました。

そのような基礎の元に、人と同じ事をしていてはお客様の気持ちを掴めないと様々なアイデアを出しています。

亀屋左京家の6代目は福助人形のモデルにもなったという大きな人形を店頭に設置。また、「江州柏原　伊吹山のふもと　亀屋左京のきりもぐさ」と売り子や芸者、遊女に歌わせたり、浄瑠璃も作るなど、現在のマスコット商品やCMソングに値するPRを図りました。

和中散(薬)を販売していた大角家(薬東市)は、常時旅人へ無料の湯茶の接待や4mもある製薬機械を実際に動かして店頭で実演するなどの工夫を凝らし、街道を行く人々の評判となりました。

編集後記

近江商人はこれまで「近江泥棒」「近江商人が通った道にはペペン草も生えない」などと言われ、誤った理解をされている方も多かったと思います。他にも、財を成した(儲けた)ことにのみ興味が集まりますが、彼らは正直で真面目に努力することで、多くの人から信用と信頼を集め、さらに必要とされ愛されていたと感じます。

今回の水都八都がそんな近江商人の魅力と努力を知るきっかけになれば嬉しく思います。

(田中)

参考文献
近江商人の理念(小倉榮一郎)、近江商人のふるさとを歩く(サンライズ出版)、近江商人学入門(末永國紀)、近江商人に学ぶ(サンライズ出版)、近江商人と北前船(サンライズ出版)、近江商人列伝(江南良三)

=交通のご案内=

■東京方面から

- 東京駅 ― 東海道新幹線 ― 約1時間55分 ― 名古屋駅
- 東京I.C ― 東名高速道路 ― 約350km ― 小牧JCT
- 名古屋駅 ― 東海道新幹線 ― 約30分 ― 米原駅
- 小牧JCT ― 名神高速道路 ― 約66km ― 米原I.C
- 米原駅 ― JR琵琶湖線(東海道本線) ― 約20分 ― 彦根I.C
- 米原I.C ― 約8km ― 彦根I.C
- 彦根I.C ― 約20分 ― 八日市I.C
- 八日市I.C ― 約30分 ― 近江八幡
- 彦根I.C ― 約40分 ― 近江八幡

■大阪方面から

- 大阪駅 ― JR京都線(東海道本線) ― 約30分 ― 京都駅
- 吹田I.C ― 名神高速道路 ― 約70km ― 竜王I.C
- 京都駅 ― JR琵琶湖線(東海道本線) ― 約30分 ― 竜王I.C
- 竜王I.C ― 約20分 ― 近江八幡

観光・物産・ボランティアガイドのご案内は

近江八幡駅北口観光案内所　☎0748-33-6061

安土駅観光案内所　☎0748-46-4234

近江八幡観光物産協会ホームページ
https://www.omi8.com

近江八幡市ホームページ　https://www.city.omihachiman.lg.jp/

近江商人とは

近江商人とは近江で商いを行う商人ではなく、近江を本宅・本店とし、他国へ行商した商人の総称で、個別には「高島商人、八幡商人、日野商人、湖東商人」などと呼ばれます。それぞれ特定の地域から発祥し、活躍した場所や取り扱う商品にも様々な違いがあるのも特徴です。

近江商人語録

商人の本務

商人に必要なのは才覚と算用と言われます。しかし、近江商人は巧妙な計算や企てを良しとせず、世の中の過不足を補い、需要と供給を調整することを本務としています。

伊藤忠兵衛（湖東商人　現：伊藤忠商事・丸紅）は「利真於勤」（りはとむるにおいてしんなり）を座右の銘としました。これは、投機商売、不当競争、買占め、売り惜しみなどによる荒稼ぎや山師商売や政治権力との結託による暴利ではなく、本来の商活動に励むというのが「勤」の意味であり、その預託として得られるのが利益としています。

三方よし

「売り手よし、買い手よし、世間よし」を表します。売り手と買い手の双方だけの合意ではなく、社会的に正当な商いや行商先での経済的貢献を求めています。古くから、企業の社会的責任を果たしてきた近江商人を象徴する言葉です。

陰徳善事

陰徳とは、売名行為の類ではなく、人知れず人の為になるような行為を言います。近江商人が行ったものには、神社仏閣への寄進、橋の架け替え工事や常夜灯の整備、学校建設への寄付、等々数多くあります。塚本定次・正次兄弟は（五個荘商人　現：ツカモト）、大規模な植林工事を行うなどして治水・治山の父ともよばれ、偉大な商人として勝海舟は「氷川清話」に記しています。

理念・商法

江戸時代の身分制度の中では、生産を行わない商人は低い階層におかれ、一部学者からは幕藩体制の基本である自給自足の体制を破壊する者と批判も受けていました。

しかし、近江商人は「儲ければよい」という考え方ではなく、社会的に認められる正当な利益を求め、地場産業の育成も心掛けました。このことが、他藩から出入り禁止や締め出しを受けることなく、商いを続けられたのです。

多くの近江商人は商品流通の操作によって生まれる差益に依存したり、投機的な取引に手を出すことはつまらない商人のすること述べています。そして、商品が品薄になっても余分な利益を求めることをせず、また天候が悪くても通常と変わらず店を開けるなど、常にお客の便宜を考えた商いに徹していました。自分の店や商品が人々の役に立ち、喜ばれ、社会に有益であるようにと心掛けることで、世の中に商人の存在意義と価値が認められたのです。

このような事は「家訓・家法・家憲・家則等の形として代々受け継がれており、明治維新、敗戦、等々の苦難を乗り越えてきた近江商人の企業の強さは、これらの経営理念の継承にあるのではないでしょうか。

武士は敬して遠ざけよ

地域経済を左右するほどの実力者となると、大名との付き合いも多くなります。しかし、近江商人は権力に依存して利益を得ることを良しとはしませんでした。

質素倹約

近江商人は、財の豊かさに見合う、人格・教養、礼儀作法、人間形成を強く求めています。奢ることは即ち身を滅ぼすことに繋がると子孫へ戒めています。八幡商人の中にも、市田清兵衛は「互いに申し合わせ質素守るべく候事」、中村久兵衛は「諸親類別家に至るまで、身分不相応な普請を致し、又は人並みにすぐれ美麗なる衣服を着用致し候者あらば、相互に申し合わせ差留め申すべき事」「別家の内、家業を粗略に致し、酒宴、遊芸を好み、身持ち溺堕なる者これあり候は同じ、早速意見を加え、もし用いざるにおいては出入り差留申すべき事」と記しています。

伴庄右衛門邸 ⑦

見学施設

寛永年間に東京日本橋に出店し、麻布・畳表・蚊帳を商いました。5代目の伴菖蹊（こうけい）は18歳で家督を継ぎ、大坂淡路2丁目に出店。学問にも興味を持ち、本居宣長、上田秋成、与謝蕪村らと親交のある国学者でもありました。

以後も、伴家は繁栄を誇りましたが、明治維新等の激動期に逆らえず明治20年に終焉しました。

現在、旧伴家住宅として開館している建物は、文政2年（1819年）の大地震後に、七代目庄右衛門が強固な家を建てようと、文政10年（1827年）～天保11年（1840年）頃までかけて新築されたものです。その後、小学校、役場、女学校、幼稚園、図書館、等の変遷を経て、平成10年度より改修工事がなされ、平成16年の4月に旧伴家住宅の一部として開館しました。

伴伝兵衛邸址 ⑧

初代の資通のときに長男資宗が本宅（のちの伴庄右衛門宅）の西隣に新家を設けて別れたものです。江戸時代から江戸日本橋へ出店し、畳表・木綿・蚊帳等を商いました。

本宅は取り壊されましたが、庭石、土蔵などが一部残され、かつての伴家の繁栄を物語っています。なお、歴代の墓は正福寺（市内魚屋町元）に現存します。

中村四郎兵衛邸 ⑨

扇屋（伴家）に奉公していた四郎兵衛が、屋号の一字を譲り受け、「扇四呉服店」と称して現在の地に享保5年（1720年）に開店したことに始まります。3代目が京都・大坂に出店するなど店を拡充し、5代目は初代八幡町の収入役として活躍しました。9代目となる今日も創業以来の「呉服」を商う㈱扇四呉服店として地域と共に歩んでいます。

野間清六邸 ⑩

江戸中期に下総（茨城県・結城の城下町）に出店し、幕末頃には、結城の御三家と言われるほど勢力を誇りました。明治時代に入っての当主が、書画等を愛好する文化人としての活躍を希望したため自主廃業しますが、現存する約千坪の本家は往時を偲ばせます。

本家の向かいに建てられた分家（昭和5年築）は、社会福祉法人グローにより「ボーダレス・アートミュージアムNO-MA」として開館されています。

野田屋長兵衛宅址 ⑪

天正13年（1585年）豊臣秀次によって開町した近江八幡は、楽市楽座や諸役免除のもと発展し、徳川時代になった後もその特権は引き継がれ、市内鍵之手町に「諸役伝馬等免除」の高札が掲げられていました。

しかし、ある時、京都からやって来た役人がこの立て札を持ち帰ったため、町民はこれまでの特権が消滅するのではと心配し、取り返そうと試みますが、後難を恐れて今ひとつ力が入りませんでした。

このような町民の姿を見た「野田屋屋長兵衛」は、京都に返還を求めて出向きますが、断られ、明和7年（1770年）、再び訴状を渡そうと試みますが、受理されず、死をもって抗議するため役人の前で自刃し53歳の生涯を終えました。野田家は代々家伝の膏薬「天真膏」を販売するなどしていましたが、本業は紺屋でした。5代目となる彼は、商人よりも義人として生きた人物でもあります。

西川吉輔宅址 ⑫

西川傳右衛門家（市内仲屋町）の分家出身で、肥料商の西川善六の7代目として文化13年（1816年）に生まれました。幕末に国学を学び、倒幕尊皇に奔走し、彦根藩の勤皇転換工作に大きな功績を残しました。彼が32歳の時に「帰正館」という塾を開いた中には「伊庭貞剛」や「高田義甫」などもいました。

明治時代に入り、日吉大社（大津市）や生国魂神社（大阪市）の宮司を勤めた後、明治13年（1880年）に没し、市内西山の共同墓地に葬られています。

高田義甫 ⑬

市内北末町で干鰯肥物を商う「納屋嘉兵衛」の8代目として弘化3年（1846年）2月22日に生まれ幼名は喜太郎と称しました。

青年期より国学や漢学を学び、勤王派として私塾を開くなど活発な活動を行っていました。明治期に入っても彼の活動は、法律相談所の開設、水産会社の会長就任、新聞社や銀行の設立など多岐にわたりましたが、明治26年（1893年）八幡銀行定期総会の席上で倒れ、47歳の若さで帰らぬ人となりました。

遺骨は孫平治町の洞覚院に葬られ、八幡公園内の碑は明治27年帝国水産株式会社によって建立されたものです。

西川伝右衛門邸址 ⑭

初代は、江戸初期に今の北海道松前城下に出店し御用商人となります。ニシン漁場などで財を成し、約300年近い間、北海道の開発に情熱を注いだ商人でした。

10代目当主「西川貞一郎」は、初代八幡町長を務める一方、日本初となるカニの缶詰開発、大阪商船発起人、八幡銀行設立に関わるなど近代的企業活動を展開し、住友2代目総理事「伊庭貞剛」は、「近江商人の典型、彼において他になし」と評価しています。

11代目当主は「西川吉之助」は、私財を投じて聾教育をけん引し、耳が聞こえない子どもでも社会で自立出来ることを目指した教育者としても知られています。

西村太郎右衛門宅址 ⑮

慶長8年（1603年）、太郎右衛門は西村家2代目の次男として生まれました。20歳の時に角倉了以（すけい）の御朱印船で長崎から安南（ベトナム）へと旅立ちます。異国の地に渡り25年、帰国のため長崎まで帰ってきますが、時は鎖国の世であり上陸は許されず、安南の地で没しました。

彼が、故郷への思いを託し絵師（菱川孫兵衛）に描かせ、日牟禮八幡宮へ奉納した絵馬「安南渡海船額」は国の重要文化財に指定されています。現在の建物はかつての警察署で、昭和49年より市立資料館の一部として使用されています。

又、太郎右衛門の兄が、異国の地で亡くなった彼を思い、屋敷内に供養塔（⑯）を建立。その後、昭和5年の御大典に併せて造成された「八幡公園」に移されました。

伊庭貞剛邸址 武佐

住友財閥を育て百年前に環境問題を考えた実業家

弘化4年（1847年）1月5日に生まれました。22歳で司法官に任命され各地で活躍するも、官界に失望して10年で退職。住友に入社後は、公害問題に取り組み、鉱山の煙害で荒れ果てた山々に大規模な植林を行いました。これらの取り組みは、足尾銅山問題の解決に奔走した田中正造も絶賛し、当時の帝国議会で取り上げています。

後に第2代住友総理事に就任した彼は、現在の「三井住友銀行、住友金属、住友電工、住友軽金属」等を設立し住友グループの基盤を築くだけでなく、第1回帝国議会衆議院議員としても活躍しました。ただ、彼は「事業の進歩発達に最も害をするものは、青年の過失ではなくて、老人の跋扈（ばっこ）である」との信念から、わずか4年で総理事を退任しました。